

平成 30 年 5 月 27 日現在

機関番号：14501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K13131

研究課題名(和文)文化伝達からみた幼児の仲間集団の発達：実験的アプローチの試み

研究課題名(英文)The development of young children's peer relationship in terms of cultural transmission: An experimental approach

研究代表者

木下 孝司(KINOSHITA, Takashi)

神戸大学・人間発達環境学研究科・教授

研究者番号：10221920

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、幼児の集団内における文化伝達のプロセスを調べるための実験的方法を開発し、文化伝達の指標化を試みることを目指した。一つ目に、文化伝達を可能にする能力として、幼児の模倣学習に影響する要因を整理して検討した。その際、over-imitationと呼ばれる現象に着目して、行為のタイプの違いが模倣学習に及ぼす影響を分析した。二つ目に、実際の幼児集団において、ある知識が伝達していくプロセスを調べて、文化伝達をとらえる指標について考察した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to develop the experimental method to investigate the process of cultural transmission in young children. First, we assumed young children's imitative learning as the ability underpinning cultural transmission and analyzed the factors influencing imitative learning. Focusing the phenomenon, known as "over-imitation", we explored what kind of action young children were more likely to imitate and discuss the key factors promoting cultural transmission. Second, we observed the transmission process of some knowledge within a children's group and discuss the indexes of cultural transmission in children.

研究分野：発達心理学

キーワード：文化伝達 幼児期 模倣学習 教示

1. 研究開始当初の背景

ヒトは文化を創造、継承して、累進的な文化進化を遂げてきた (Tomasello,1999)。発達心理学の観点から、ヒトに固有の文化伝達 (cultural transmission) を可能にする能力についてさまざまな研究がされている。その結果、ヒトの幼児は他者の意図を読み取り、他者の行為を忠実に模倣したり、相手の知識状態に応じて、知識や技能を教示できることなどが明らかにされつつある。ただ、幼児期の文化伝達に影響する要因について、まだ十分に整理はできておらず、また、実際の幼児集団において文化 (知識、技能、規範) がどのように伝達されていくのかについて、その発達的变化は明らかにされていない。

他方、保育実践に目を向けると、特別な支援を要する子どもが変化する要因に、「仲間集団が育つ」ことがあることを多くの保育者が指摘している。この実践知は、従来の発達心理学では十分に扱われていないが、具体的な現象で整理すると、1) 集団内で、ある遊びや特定の行動様式が伝播して「ブーム」が起こる、2) 支援児も含めた教えあいが出現する、などの特徴が抽出できる。こうしたことで、集団内の相互理解とつながりが増すと考えられ、文化伝達を発達的に検討し、その成果を活用することで、「集団の育ち」という事実を客観的にとらえることができる。

2. 研究の目的

本研究は、幼児の集団内における文化伝達のプロセスを調べるための実験的方法を開発し、文化伝達の指標化を試みることを目指している。そのために、次のことを研究期間において明らかにすることを目的とした。

(1)文化伝達を進めるための基本ツールである模倣学習について、その効率性や忠実性に影響を与えている要因を整理して、その発達的变化を検討する。

(2) 半統制的な幼児の集団場面において、文化伝達プロセスを観察して、幼児の文化伝達をとらえる方法と指標を検討し、それらを用いて幼児の仲間集団の発達を考える材料を提供する。

3. 研究の方法

(1)<研究1>模倣学習に影響を及ぼす要因に関する検討

①研究1の目的：模倣学習において、忠実な模倣は効率的な文化伝達を促進する一方で、無関連な行為も模倣する over-imitation が生じることがある。その要因として、無関連な行為を因果的に必要なものとして認知するのではなく、慣習的に必要なものとしてみなす社会的慣習仮説が提唱されている。それによると、モデルの行為が、ある目標に向けて行っているのではなく、その行為そのものが目的となっている場合に、over-imitation が増加するとされている (Clegg & Legare, 2016a)。こうした行為タイプの影響は、行為

を行う幼児のスキルや規範性の理解の発達と関連することが予想されるため、本研究では年中児と年長児を対象にして発達的变化を検討する。

②参加児：保育園の年長児20名を目標明示群10名 (男児4名、女児6名、平均73.7ヵ月、範囲68~82ヵ月)、慣習群10名 (男児6名、女児4名、平均73.0ヵ月、範囲65~79ヵ月) の2群に、年中児19名を目標明示群9名 (男児3名、女児6名、平均62.0ヵ月、範囲56~66ヵ月)、慣習群10名 (男児6名、女児4名、平均58.0ヵ月、範囲52~62ヵ月) の2群に分けた。

③手続き：材料セットをトレイに配置して子どもの前に提示した。子どもに対面した実験者が、目標明示群においては「ここにあるものを使って、これから首飾りを作ります。おじちゃんが作るをよく見てね。では、首飾りを作ります。」、慣習群では「ここにあるものを使って、みんなが必ずすることがあります。おじちゃんがすることをよく見てね。では、みんなが必ずすることをしてみます。」と教示した。実験者は一連の行為を演示する (Fig.1)。その後、子ども自身に「次は～ちゃんの番だよ、やってみて」と教示。あわせて、実験補助者が操作するパペットに同様のことを教えてもらう。なお、そのパペットは手操作が苦手であるという設定とした。

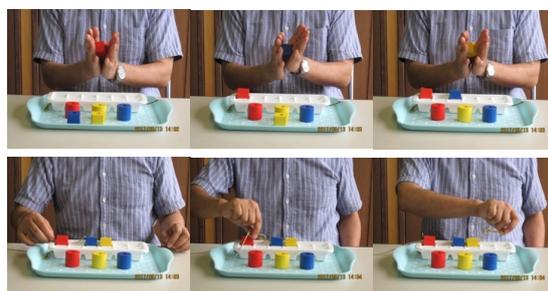


Fig.1 モデルによって演示された行為

(2)<研究2>集団場面における文化伝達の検討

①研究2の目的：文化伝達を探る試みは、比較認知科学 (Whiten & Mesoudi,2008) や社会心理学 (Caldwell & Milien,2010) などの領域で着手されているが、幼児を対象にすることは、幼児「集団」の実験的統制が困難なこともあり、まだ研究の蓄積は少ない。本研究では保育場面で実施可能な課題を用いて文化伝達を調べる方法を試行的に実施して、その妥当性や課題を検討する。

②参加児：保育園4歳児クラス17名。

③手続き：1クラスにおいて、子どもたちが見たことのない新型紙飛行機がどのように伝播するかを観察し、事後に紙飛行機の作り方を一人ひとり確認した。具体的な流れは次の通りである。1) 第1回紙飛行機大会。担任の指導のもと、折り紙を使った紙飛行機大会をホールで行い、飛距離を競い合った。

このときは特に保育者から折り方を指示しなかったが、全員が標準的な紙飛行機(旧型)を作った。最後に、園長先生が完成した円筒の新型紙飛行機を持って登場し実演して、子どもたちの関心を引いた。この時、園長先生はすぐに退席するが、その際「今度また作り方を教えてあげるけど、職員室は狭くてみんな入れないので、2人だけに教えてあげるね」と告げた。2) 秘伝場面。(1週間後)園長先生が男児1名、女児1名に別途、新型紙飛行機の作り方(Fig.2 参照。ペットボトルを使う工程は本来、不要であるが、モデルの模倣の忠実度を見るために導入した)を教示。3) 第2回紙飛行機大会。モデル役2名も交えて、1回目と同様に紙飛行機大会を行い、一斉の飛距離競争を2回行った。4) 第3回紙飛行機大会。2日後、2回目と同様。なお、以上の集団場面は3名の観察者によってそれぞれビデオ記録された。5) 個別インタビュー。第3回大会の10日後、全対象児に対して個別に、a)新型紙飛行機の作り方、b)その教示ないしは情報伝達経路、c)一番よく飛ぶ紙飛行機の作り方を質問した。

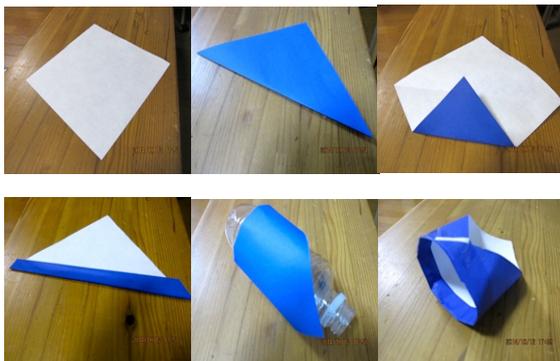


Fig. 2 新型紙飛行機の製作工程

4. 研究成果

(1) 研究 1

①モデルに対する忠実度：提示されたモデルをどの程度忠実に模倣ないしは教示していたのかをみるために、モデルの6つの要素が参加児の反応に見られたかでカウントして(1要素1点)、忠実度得点(0~6点)を算出した。その結果を Table 1 に示した。

Table 1 群ごとの課題別忠実度得点の平均

		模倣課題	教示課題
年	目標明示群	3.00(0.94)	2.67(0.67)
中	慣習群	3.50(1.50)	3.50(1.28)
年	目標明示群	2.70(1.01)	2.30(1.41)
長	慣習群	3.60(2.01)	3.50(1.28)

括弧内は S. D.

模倣課題では年齢ならびに条件の主効果は認められず、教示課題において条件の主効果が認められた ($F(1, 35)=5.78, p<.05$)。

②関連性の低い項目と相手の応じた教示：首飾りを作るのにもっとも関連性が低い「こす

る」行為と、手操作に苦手な学習者には補助となる「モール」使用の見られた子どもの人数を Table 2 に示した。年中児においてのみ、「こする」行為をする人数は慣習群の方が高い傾向が認められた(模倣課題： $p=.069$ 、教示課題： $p=.020$)。

Table 2 こするとモール使用のあった人数

		模倣課題		教示課題	
		こする	モール	こする	モール
年	目標	3(33.3)	4(44.4)	1(11.1)	3(33.3)
中	慣習	8(80.0)	6(60.0)	7(70.0)	5(50.0)
年	目標	1(10.0)	2(20.0)	0(0.0)	3(30.0)
長	慣習	3(30.0)	4(40.0)	3(30.0)	4(40.0)

括弧内は割合

③本研究の位置づけと課題：先行研究に比べ、目標を明示してもモデルを忠実に模倣する傾向があったことが、両群の違いが認めにくい要因となっている。その一つの原因として、本報告者(年配男性)がモデルとなったことである種のバイアスがかかり、幼児の忠実な模倣を促した可能性は高い。また、Clegg & Legare(2016b)によると、over-imitation の出現には文化差があり、米国の子どもよりも南太平洋諸島の子どもの方が模倣の忠実度が高いというデータもある。モデル役年齢や性別をさらに統制して、モデルの効果を検討することは課題である。

今回は、他者への教示は1回だけであったが、現実の集団場面ではある子どもから別の子どもへ、その子どもからさらに他の子どもへと、伝達は連鎖していく。その過程において、行為系列は精選されていく可能性は大きく、連鎖伝達場面を設定して、文化伝達の中で情報変容を調べていくことも課題である。

(2) 研究 2

①新型紙飛行機の伝達状況：第2回大会の第1試行で新型を作った子どもは4名であったが、同第2試行で7名、第3回大会8名になっており、集団内での伝達は起こっていた。②新型紙飛行機の学習状況：個別インタビューにおいて、新型紙飛行機の作り方を尋ねたところ(Table 3)、途中の工程の欠落のありつつも15名中12名が新型を作成でき($p=.035$)、この新規な紙飛行機の作り方は何らかの形で社会的学習がされたといえる。ただし、工程5のペットボトルを使って紙を巻くところまで再現したのは5名のみで、うち2名はモデルとなった子どもであった。

Table 3 新型紙飛行機の学習状況

	N	工程 5
新型紙飛行機完成	9	3
新型紙飛行機完成 (2を省略)	3	1
三角形そのまま丸める (1, 2→円形)	2	1
作れない	1	-

③学習経路：新型紙飛行機の作り方をいかに学習したのかを尋ねたところ、「自分で考えた」と情報源の混乱をした者は2名のみで、それ以外は園長先生、2名のモデル児名をあげて正しく再生できた。

④本研究の位置づけと課題：幼児を対象にした文化伝達の研究はまだ着手されたばかりで、その方法については確定的なものがない。そうした現状に対して、本研究の紙飛行機のように子どもにとってなじみのある素材を使って、統制した場面において文化伝達を観察することができたのは、重要な達成である。また、実施にあたって、モデル役を保育者と協議することによって、子どもの技能、社会性、リーダー性などが文化伝達に影響を及ぼす要因として確認でき、今後の研究に重要な指針が得られた。

(3)まとめと課題

文化伝達に対する実験的アプローチは、生物学的進化論(Mesoudi, 2011/2016)に触発されて成立した文化進化論によって試みられてきている。心理学においてはもっぱら社会心理学領域において、研究が蓄積されているが、発達心理学ではまだあまりなく、本研究はその課題に挑戦したものであった。関連する要因を少しずつ整理することができたが、さらに検討すべき課題として次のようなことがある。

①文化伝達を成立させている模倣学習と教示の基盤に関する検討

模倣学習には、行為のタイプ(目標明示、慣習)、行為の対象物の有無、モデルの属性が関連し合って影響を与え、その内容は発達的に変化することが示唆された。それらを実験的に解明することは課題となる。

また、自ら学んだことを他者に教示することも、文化伝達には欠かせない。その伝達過程で、他者の技能や知識に応じた教え方ができるのか、あるいは情報の欠落や伝達ミスが起こるかどうかも、場合によっては新たなアイデアが生まれる可能性を含んでおり、模倣学習だけではなく教示にも注目することは今後も重要になる。

②外的妥当性の高い日常場面の検討

学習と教示が実際の場面でどのように発揮されているのかを検討することは、引き続きの重要課題である。その際、今回のように子どもにとって新規な制作物を日常に持ち込むという方法とあわせて、通常の保育場面で子どもたちが学ぶことの多い、こまや剣玉などの習得とその伝達に着目して、継続的に伝達過程を追うことは、保育過程の分析としても意義のあるものとなる。

③保育実践における集団づくりとの対応

保育実践において「集団の育ち」として保育者が認識しているものを、インタビューなどで明らかにして、本研究で見てきた文化伝達の指標との対応を検討することは、発達心理学研究と保育実践を接続することになる

う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

- ①吉田真理子・木下孝司 未来の出来事の生起可能性に関する幼児の認識：先行経験の影響に着目して 人間発達研究所紀要、査読有、30、2017、2-14.
- ②木下孝司 「1歳半の節」に関する発達心理学的検討。障害者問題研究、査読無、44、2016、10-17.
- ③木下孝司 乳幼児・児童期の発達研究の動向と展望：「社会的な関わり」に着目して教育心理学年報、査読有、55、2016、1-17.
- ④木下孝司 幼児期における教示行為の発達：学習者の熟達を意図した教え方に注目して 発達心理学研究、査読有、26(3)、2015、248-257.

[学会発表](計 3件)

- ①木下孝司 幼児の模倣学習と教示における行為タイプの影響 日本心理学会第81回大会、2017.9.20、久留米シティプラザ(福岡県)
- ②木下孝司 幼児期における文化伝達の発達—研究方法に関する予備的検討。日本教育心理学会第58回総会、2016.10.8、かわ国際会議場(香川県)
- ③Kinoshita, T. Longitudinal study on the development of Origami (paper-folding) teaching in young children. International Society for the Study of Behavioural Development 24nd Biennial Meeting., 2016.7.11, Vilnius(Lithuania)

[図書](計 4件)

- ①木下孝司 生涯発達をとらえる基礎理論 山崎晃・藤崎春代(編)、講座・臨床発達心理学① 臨床発達心理学の基礎 ミネルヴァ書房、2017 292(25-47).
- ②木下孝司 心の理解 田島信元・岩立志津夫・長崎勤編 新・発達心理学ハンドブック 福村出版、2016、1004(387-396).
- ③木下孝司 自己と「心の理解」の発達 子安増生・郷式徹編 心の理論：第2世代の研究へ、2016、228(173-186).
- ④木下孝司 幼児期の「心の理解」：心を理解するということが「問題」となるとき 子安増生編 「心の理論」から学ぶ：発達の基礎：教育・保育・自閉症理解への道 ミネルヴァ書房、2016、264(81-93).

[その他]

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木下 孝司 (KINOSHITA, Takashi)
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・
教授
研究者番号：10221920

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者 なし